

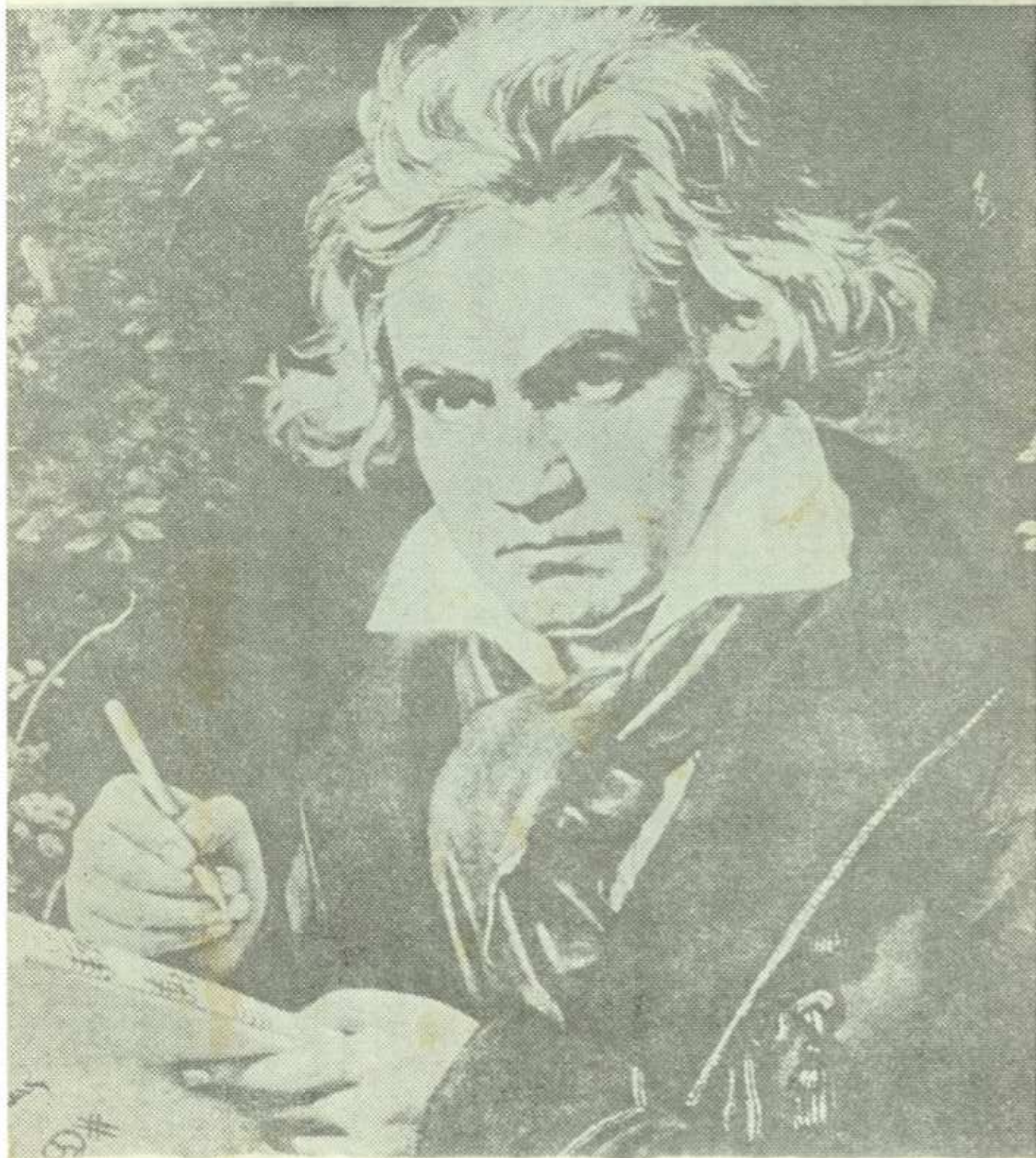
大宮労音

・73 / 12

№ 84

大宮勤労者音楽協議会機関紙

編集 / 大宮労音宣伝部



大宮労音の念願であったベートーベン「第九」交響曲が遂に実現しました。

一年前、大宮労音が「第九」を例会として行なり、しかもシロウトばかりの急造合唱団で、ドイツ語で暗譜という事を発表した時に、労音の内外から様々な反響を呼びおこしました。しかし、音楽に多少なりともかかわりをもつ者にとってこのベートーベンの大曲を一度はうたってみたいというのが、誰でもが持つ感情ではないでしょうか。

音楽を民衆の手に取り戻したといわれるベートーベンの一生は幸福ではなかったと言われています。それでは、現代に生きる私達は幸福でしょうか。

インフレに生活を脅かされ、公害にむしばまれ、人を信じる事が困難になりつつある今こそ、ベートーベンが一生をかけて追求した思想とシラーの *Die Freiheit der Menschheit* (もろ人よ、いだき台え) の思想が今日、性を失わず

に生きていくのではないのでしょうか。

年末には欠かせない音楽的大行事の一つとなった「第九」は、埼玉においても今年に労音も含めて四回行なわれます。へ

交響曲「第九番」

公演にあたって



△アマチュアだけの「第九」合唱は埼玉県では始めての事であり、その成果が各方面から注目されており、

埼玉第九合唱団は、アマチュアだからという考えに甘えるのでは

なく、自分達の力をフルに発揮し、最高の「第九」をうたい上げようと五月からきびしいレッスンを重ねてきました。

歌場をもつサラリーマンから、先生、主婦、高校生といろいろの

くれるでしよう。

その意味からいえば、技術的にもまだまだ理想には遠いとは思いますが、合唱団の苦勞と感激と熱意だけは人一倍負けない合唱団です。この合唱団を最初から最後まで御指導して下さいました指揮者の横山千秋氏、田尻明規氏、神田武寿氏に心からの感謝を申し上げますと共に、この第九例会を成功させるために御協力下さいました県内の音楽専門家の皆様にも厚く御礼を申し上げます。

ベートーベンがこの大曲を初演した日を忘れないと同様、私達大宮労音にとって、又、五月から心身を「第九」にかたむけてきた合唱団にとって、一九七三年十二月二十一日は決して忘れられない日となるのでしよう。

今日この会場に参加されたすべての人と共に、より大きな声で、「Heilig ist der Name des Herrn» を一日も早くうたえるように、また来年もがんばる決意です。

大宮労音運営委員会

◎な人達が「第九」をうたうために集まりました。

私達はこの事を一番大切にしたいと考えております。

良い音楽は誰にでも愛されるしすばらしい曲は万人を感動させて



群馬交響楽団



外山雄三

第九交響曲

横山千秋



田尻明規



神田武寿



指揮 外山雄三
 ソプラノ 大川隆子
 アルト 成田絵智子
 テノール 下野 昇
 バス 田島好一
 合唱 埼玉第九合唱団
 合唱指揮 横山千秋
 管弦楽 群馬交響楽団
 田尻明規
 神田武寿

大川隆子



成田絵智子



下野 昇



田島好一



(プログラム)
 ベートーベン
 △エグモント序曲
 ベートーベン
 交響曲第九番
 (二巨調作品一二五(合唱))

推薦の言葉

埼玉県知事

畑 和

音楽を味わうということは、その作品が演奏を通じて、わたしたちの生活とどうかかわり、影響をもつかという点をきわめることだといわれています。

ベートーベンの音楽が、広く人びとに愛されるのは、それが創造への情熱とヒー・マニズムにあふれ、つねに平和と喜びの社会を追究してやまない心がそこにあるからでしょう。

そしてその心の中に、今日わたくしたちのすべてが求める理想と深く通じ合うものがあるからなのです。

今年「交響曲第九番」の公演にたぐさんの県民のみなさんが「埼玉第九合唱団」として参加し、ベートーベンの人類に対する悲願を心として、高らかに歌いあげることとは、こうした意味からもほんとうにすばらしいことだと思えます。本県の音楽文化の発展のためにこの公演の成功を期待し、広く県民のみなさんのご鑑賞をお勧めい

出演者紹介

指揮・外山雄三

東京芸術大学卒。11歳、大フィル、京響の指揮者を歴任。その間ヨーロッパ諸都市、ソビエト、ルーマニアなどを指揮旅行し、現在わが国第一線で活躍する指揮者、作曲家。

労働例会にも数多く出演し、ハフィデリオ、ハゴッブス、コンサート、レタイエム、ベルディ、そしてハカルメン、などでも話題を残しています。オペラ、ハカクも長き不在、交響曲、八の歌など作曲にも大きな功績があります。

ソプラノ・大川隆子

東京芸術大学卒。一九六八年、日生劇場の「オルフェオとエウリディチェ」のアモールで認められ、一九六九年暮れの読売日響の「第九」のソロを歌った。一九七〇年には労働の「フィデリオ」のマルツェリーネ等を演じ、その後も着実に進歩を示している。

アルト・成田松智子

東京芸術大学卒。一九五八年労働例会に入賞、ハリゴレット、デピット。たちまち第一線にのび出しました。数多くのオペラに出演していますが、カルメン歌手として他の追随を許さず圧倒的な好評を得ています。

テノール・下野 昇

東京芸術大学卒。一九六七年ソフィアで開かれた国際コンクールでプムガリア作曲家協会賞を受賞以来、オペラをはじめハメサイア、ハ第九などのソリストとしても活躍しています。

バリトン・田島好一

国立音楽大学卒。一九五八年世界平和友好祭音楽コンクールに日本代表で出場し入賞。一九六三年、一九六五年イタリアに留学の後、三つの国際コンクールに一位、二位、三位と輝やかしい成績をあげる。オペラ、ハ梅姫、ハ蝶々夫人、ハトスカ、ハカルメン、ハフィデリオなどに出演。

ベートーベンと曲目 丸山桂介

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーベンは、一七七〇年に生れ、一八二七年に死んだドイツの作曲家である。生地ボン（現在西独の首都）で少年期を過ごした彼は、ヤガートンに出て華々しい活動を展開。まず、ピアノリストとして

世の注目を集め、耳の病に悩まされてからは演奏をやめ、かわって作曲家として重きをなした。作「からみたベートーベンの創作活動は、通例前期、中期、後期の三つに区分される。そして、この三区分はまた、彼の人間の、精

神的变化のそれにも対応していて、いわゆる「ベートーベンらしい」音楽が集中的に作られるのは中期以後である。交響曲「英雄」や「運命」などに聴かれるように、この期のベートーベンは、いかにも雄渾であり苦悩と意志の力に満ちあふれている。音楽の説得力に富み、しばし

たします。

後援（敬称略）

埼玉県知事 畑 和

埼玉県合唱連盟理事長

尾花 勇

作曲家 土肥 泰

埼玉新聞社社長 武井兼雄

朝日新聞社浦和支局長

村上 洋

毎日新聞社浦和支局長

堅木昇三

埼玉県高等学校教職員組合委員長

山下楠一

埼玉職員組合中央執行委員長

井上信甫

ば押しつけがましく思えるほど、強引にその哲学を開陳する。しかし、後期の、特に晩年の諸作、ピアノ・ソナタの第三十二番や弦楽四重奏曲第十六番などでは、そりしたあらゆるものを超越した、孤高の魂の歌が聴かれる。

恐らく、その人間的思索の深まりにおいて、また晩年のひたすら瞑想にふけるかのよりな「こえて」一心境において、ベートーベンは音楽史上に不滅の足跡を残したといえるだろう。

作品は、九つの交響曲、幾つかの序曲、十六の弦楽四重奏曲、三十二のピアノ・ソナタ、十曲のバイオリン・ソナタ、五つのチェロ・ソナタ、七つのピアノ三重奏曲、五つのピアノ協奏曲、一つのバイオリン協奏曲などがその主なもので、あとは室内楽や歌曲が加わるが、その他重要なものとして「ミサ・ソレムニス」と不思議なことに一曲しか作らなかつたオペラ、「フィデリオ」がある。

△エグモント▽序曲

序曲「エグモント」は、ベートーベンが一八〇九年から翌十年に

かけて作曲した、ゲーテの戯曲、「エグモント」への劇音楽中の序曲である。このころは、彼の創作の中期、気力の充実していた時期に相当する。

エグモントは歴史上の実在の人物。一五二二年に生まれ、六八年に死んだネーデルランド（オランダ）の軍人・政治家。当時は、ルネーに代表される宗教改革の時代であり、スペインの勢力の極めて強大な時代であった。宗教改革は、旧教（カトリック）と新教（プロテスタント）に分裂して深刻な抗争を生み、カトリック教改革やかなりスペインは、ネーデルランドを支配していた。エグモントは、フランス対スペイン戦争に加わって武名を上げ、ついで祖国における新教の普及と独立を圖ったが、スペイン軍に捕えられて処刑された。しかしネーデルランドは、この事件をきっかけにして団結してスペインにあたり、ネーデルランド北部七州が独立を獲得した。なお、オランダという名称は、そのうちの一州ホーランド州に由来する。

ところで、エグモントの劇的生誕に目をつけて戯曲にしたのはド

イツの文豪ゲーテであるが、その戯曲のウィーンでの上演に際してつくられたのが、このベートーベンの曲である。劇音楽、つまり劇の進展につれて演奏される「エグモント」は序曲や幕間の音楽、劇中の歌などからなるが、なかでも序曲は最も有名で好んで演奏会の前座に演奏される。

——独立を圖るエグモントはスペイン軍に捕えられ処刑を宣告される。愛人クレトルヒェンは彼を救おうとするが果さず毒をあおる。エグモントは刑場に行く寸前、まどろみの中に彼女の姿を夢見、彼女から祝福され目ざめると力強い足どりで刑場に向い、というもの。ゲーテ以上に、ベートーベンの好きそりなストーリーである。序曲は三つの部分からなるが、後半の勇ましい部分は劇の最後に奏される「勝利の交響曲」である。

交響曲第九番

交響曲第九番二短調は、ベートーベンが一八二四年に完成した独唱と合唱を伴う交響曲である。「合唱」あるいは「合唱付」の別

第九合唱団

のあゆみ

芳音の第九公演は、合唱部分を会員自から歌い上げるところに、最大の特徴があります。従って、この公演の成功の鍵はベートーベンの第九にふさわしい壮大な合唱団をいかに創り上げるかにかかっています。その準備は一年も前から進められ、半年に及ぶ苦しいレッスンを経、今その成果が試されようとしています。この合唱団の歩みを準備時期にさか昇り、記録してみたいと思います。

七二年六月 芳音総会にて第九公演決まる。

七二年十二月 第九の爲のプロジェクトチーム結成

七三年三月 協力関係者会議
地元音楽家、有志を招いて公演と合唱団創りの概要を協議

七三年四月 団結成の呼びかけ
始る。合唱団指導の三氏決まる。

レッスンスケジュール、大宮、川越、春日部の三会場と決まる。

七三年五月 関西研修旅行団
プロジェクトチームの二名、和

歌山、姫路にて成果ぶ。

称は別に何らかの標題を意味するものではない。終楽章に用いられた詩文は、ゲーテと同じころのドイツの文豪シラー（一七五九—一八〇五）の手になる、人間性と同胞愛、友情と愛情の頌歌「歓喜に寄す」である。

ベートーベンは、シラーのこの頌歌を読んで、これをもとに何かを作りたいたいという気持をウィーンに出る前から持っていたようである。従って、彼は「歓喜に寄す」の作曲を考えてからこの交響曲を作りあげるまでに約三十年以上の年月をついやすことになるのである。しかし、実際の作曲は一八二二年ごろから集中的に行なわれた。ベートーベンまでの交響曲は八イドンのものにして、モーツァルトのものにしても、いずれも形もそれほど大きくなく、まして交響曲に歌を加えるなどということには誰も考えていなかった。形のうえからみれば、例えば「英雄」は既にハイドンやモーツァルトの交響曲を大きくこえていた。第九で音楽を使つたことによつて、ベートーベンの交響曲は、その後の音楽史にさまざまな影響を与えたのである。という点にもまじり

重要なのは、第九は当時（古曲派）の交響曲の総決算であり、ベートーベンの登りつめた、一つの頂点である、ということである。

曲は、一時間をこす大曲であるが、そこで語られることは、非常に多いようでもあり、また極めて少ないようでもある。第一楽章の冒頭から、曲はベートーベンの特有の、形式的にしつかりしたまじりなみせながら進み、第二楽章、第三楽章と、ときに荒々しく、またときには静かに語りかけ、ゆつたりと思案を練り、冥想にふけて深めどつきせぬ壮大なる世界を築きあげる。と同時に、あらゆる音楽は、ただ一つのこと、つまり第四楽章でバリトンが歌い出す、「おお友よ、このよき音ではなく、私たちはもつと心持のよい喜びに満ちたものを歌い出そうではないか」、およびこれに続く「歓喜よ、美しい神々のようなきらめき、楽園の娘よ。……おまえの静かな翼がとどまるところで、すべての人は兄弟になる」ということを歌うために作られているのである。「この音でなく」と「すべて

の理想であつたのだから。曲は、その後さまざまなことを歌い進み、最後に「百万の人々よ、互いに抱きあえ、全世界の接吻をうけよ、兄弟よ、星のあげばりの上に愛すべき父はかならず住みたもう云々」を歌い、万人が歓喜に酔いける様を賛えて盛大に曲を閉じる。

なお最初にバリトンの歌う「この音でなく云々」はシラーの原作にない詩句で、ベートーベンの自作である。

それから、この第九は、日本では毎年暮になると好んで演奏されて「第九狂騒曲」の観を呈するが、このこととベートーベンの音楽との間には何の関係もない。いわば、年末の第九公演は、特殊日本の現象であつて要するにこれは一種の「除夜の鐘」である。とともに、オーケストラにとつては、やれば必ずもうかる大人袋、あるいはポリーナスの貴泉源でもあるといえるだろう。一説によれば近い将来、「紅白第九合戦」が開かれるとか。ハントですか？（筆者は音楽評論家）

七三年五月十一日 合唱団結団式
 団結成の呼びかけに応じて入団
 あいつぐ。結団式には百名参加
 し十二月の公演を誓い合った。
 団役員が決まり、団委員会発足
 七三年五月廿一日 大宮会場第一
 回レッスン
 七三年五月廿五日 川越、春日部
 第一回レッスン
 七三年五月廿八日 第二回レッス
 ン 団員二百名突破
 七三年六月四日 公開レッスン
 七三年六月十八日 第五回レッス
 ン 団員三百名突破
 七三年八月六日 団交流会
 七三年八月十日 レッスン参加者ド底
 延長
 七三年九月十日 男性バート時間
 延長
 七三年十月 レッスン参加を向上
 させる為、地域別グループをつ
 くり、団員間の協力体制整える。
 七三年十月十五日 これより合唱
 レッスンとなり大宮に集中する。
 七三年十月十八日・十一月一日
 外山先生のレッスンを受ける。
 十二月に入ってから先生のレッ
 スンも一層きびしさを増し、又団
 員も師走の寒風の中歯をくいしば
 り頑張り抜き今日の公演を迎えて
 います。

一 埼玉第九合唱団 団員名 一

- △ソプラノ▽ 阿部裕子、荒木ヤ
 子、石井敏子、宇佐見博子、上
 原志那子、内田君代、高野なか子、
 江城明子、江田恵美子、小倉和江、
 大久保かよ、加藤ゆみ、狩野節子、
 金子智子、神原美美子、黒田啓子、
 不来方文子、佐藤多美子、斎藤和
 子、斎藤佐和子、椎原和子、惣山
 みどり、田中紀子、田中弘子、田
 村由美子、輪田延代、富田千恵、
 浪江光史、多塚三重子、中島清江、
 野口陽子、早川睦子、香場悦子、
 広田和子、広田陽子、藤島トモ、
 藤田陽子、星野明枝、松木やす子、
 峰岸佳子、山北淑子、山口美千子、
 柳沢百合子（以上大宮）、有山順子、
 岩田由江、内田恵美子、加藤真理
 子、菊地キヨ子、栗原照代、根岸
 みつ江、山田節子（川越）
- △アルト▽ 天野貞子、新井勝美
 荒井教子、荒井桂子、飯ヶ浜淑子、
 磯貝香世、今城節子、岩崎洋子、
 内田洋子、梅山カオル、大沢英子、
 大塚たみ子、岡野恭子、奥山美穂、
 落合千鶴子、落合三弥子、角田愛
 子、桂田澄子、川辺治美、菊地和
 美、菊地セキ、菊地弘美、北爪隆
- 夫、河野穂子、小出初美、小杉登
 美子、小林丹生、全野和子、清水
 隆子、島村満里子、沢沢久子、周
 東突江、菅原光恵、鈴木智子、瀬
 川和定、草加民子、双山良子、田
 中政子、田中康子、田中淑子、平
 弘子、高垣幸子、高橋久菊、高倉
 城穂子、津久井美穂、戸叶那子、
 利根川紀子、長沼久美子、中山愛
 子、羽鳥由貴子、馬場 恵、梅林
 寺祥子、福沢かほる、福島初子、
 藤原奈子、星野ユキ子、堀江君子、
 堀越俊子、真島はるみ、松本とも
 子、丸山道子、山本玲子、吉崎尚
 子、吉田里子、吉野久美子、渡辺
 由美子（以上大宮）、伊藤紀恵子、
 是枝美子、下館伸枝、須江政子、
 田中紀代子、田中成子、浜尾智恵
 子、細田恵子、宮下本子、矢沢美
 和子、渡辺よし、（川越）
- △テノール▽ 浅野 泰、阿部和
 幸、阿部太彦、飯ヶ浜長次、宇賀
 神清、植松宜喜、大竹良夫、大塚
 正充、加藤健司、金子義夫、唐紙
 幸雄、熊井知二、桑原法行、佐藤
 誠一、斎藤仙吉、菅野 進、高橋
 宗雨、高橋光男、鶴田 誠、中野
 秀明、馬場雅之、梅林寺有、三村

隆男、宗像英哉、村松武彦（大宮）
 草間太郎、小鷹千秋、斎藤 暁、
 田中国彦、高野 進、肥島信夫、
 樋口泰延、増田章二

△バス▽ 安孫子亨、石井金吾、
 小河原道雄、大江信男、大下賢治
 熊沢 清、近藤信幸、佐藤 勲、
 沢沢泰治、鈴木武夫、高島敏道、
 高橋節三、道宗直昭、古戸 匡、
 藤田正志、堀内 浩、三沢真龍、
 森本正一、山中 章、横山一正、
 （大宮） 菊地 勉、小泉 弘、
 高橋 勉、竹内 努、人見那夫、
 福島 豊、渡辺康幸

